



水星交響樂團

MERCURY SYMPHONY ORCHESTRA

第 65 回 定期演奏会

2023年 **5月 21日** **日** **13:30** 開演 (12:30 開場)

すみだトリフォニーホール 大ホール

水星交響楽団 第65回定期演奏会

ベンジャミン・ブリテン ヴァイオリン協奏曲 (約30分)

第1楽章 Moderato con moto

第2楽章 Vivace

第3楽章 Passacaglia: Andante lento

— 休憩 (20分) —

グスタフ・マーラー 交響曲第5番 嬰ハ短調 (約70分)

第1部

第1楽章 In gemessenem Schritt. Streng. Wie ein Kondukt.
(正確な歩みで、厳格に、葬列のように)

第2楽章 Stürmisch bewegt. Mit grösster Vehemenz.
(嵐のように激しく、いっそう大きな激しさをもって)

第2部

第3楽章 Kräftig, nicht zu schnell. (力強く、速すぎずに)

第3部

第4楽章 Adagietto. Sehr langsam. (アダージェット 非常に遅く)

第5楽章 Rondo-Finale. Allegro giocoso
(ロンドーフィナーレ。アレグロ・楽しげに)

水星交響楽団

1984年に一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。年2回ペースで定期演奏会を開催。マーラーをはじめとした大編成の曲に取り組み一方、一般的には意外に演奏されない佳曲も積極的にとりあげており、特徴あるプログラミングは好評を得ている。2019年の第60回定期演奏会のマーラー交響曲第8番「千人の交響曲」でマーラーの交響曲演奏を完成させた(未完の第10番を除く)。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。



アンケートのお願い

演奏会終了後に今回の演奏会のご感想をお聞かせください。
右に掲載しているURL、もしくはQRコードからアンケート
フォームにアクセスしてご記入ください。

※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源をお切りください。
アンケートは休憩中や演奏会後にご記入ください。

PCなどから

suikyo.jp

スマートフォンなどから



ごあいさつ



水星交響楽団
運営委員長 植松隆治

貧乏学生の身分で、外国のオケなどほとんど実演を聴けませんでした。幸いなことにこの時の演奏は録画されていて、オケの同期友人宅でそれをみたときの感動は今でも忘れられません。それまでレコードでしか聴けなかったプレイヤーたち（ハーセス、クレヴェンジャー、フリードマン、ジェイコブズ！金管奏者ばかりでスミマセン）が動いて演奏しているだけでもう堪りませんの世界でしたが、とにかくその名人芸の嵐に圧倒されました。オケマンにとっては見せ場だらけ。全くなんてスゴイ曲をマーラーは書いてくれたのでしょう。いつかは（できるなら）あんな風に演奏したい！この時からマーラーの5番は憧れの曲になりました。

それから、早いものでウン十年。時は流れましたが、この曲のカッコよさは変わりません。

水響も若い世代が増え、シオルティ／シカゴなんて遠い昔かもしれません。でもこの曲に対してはそれぞれの感動があるはず。『イケてる』演奏をお届けできればと願ってやみません。

ブリテンのコンチェルトでは、西江辰郎さんと久しぶりの共演が実現しました。

これまで演奏機会はあまりなかった曲ですが、ようやくこの曲の真価が認められてきたようで、実演も増えてきました。室内楽的なアプローチから大管弦楽まで幅広いレンジでの対応が要求されますが、多彩な活動を行っておられる西江さんにピッタリと思います。

それでは、ごゆっくりお聴きください。

本日はお忙しいところ、私たち水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、ありがとうございます。

今回のメイン、マーラーの交響曲第5番ですが、プロ・アマ問わず、オーケストラの人気レパートリーとしてすっかり定着したように思います。水響でも、1990年に初めて取り上げてから今回で4回目となり、水響のマーラー演奏歴では最も多くなりました。この曲のどこにそのような魅力があるのでしょうか。

冒頭のトランペットが奏でる「運命」主題による葬送行進曲から陰鬱かつ深刻に始まりますが、様々な人生模様を経て、天上界の調性と呼ばれるニ長調で輝かしく終結（ベートーヴェンの交響曲第9番と同じ）するという、まさに「暗から明」のカタルシスは、もちろん大きな要素でしょう。また、ワルツ（第3楽章）・バロック（第5楽章）など構成の妙も聴きどころと思われま。

しかし、もうぶっちゃけではありますが、なんといっても、この曲はカッコいいのです！私が学生のころ、シオルティ指揮／シカゴ交響楽団の来日公演でこの曲が演奏されました。

指揮者紹介



齊藤 栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮している。著書に「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしよせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

西江辰郎/ ヴァイオリン

NISHIE Tatsuo, violin

新日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター及び、久石譲Future Bandバンドマスター。幼少期より辰巳明子氏に師事し、桐朋学園ソリストディプロマコース修了。スイスに留学しティボール・ヴァルガ氏に師事。メソッドを継承する。室内楽を安永徹、市野あゆみ各氏に師事。2001年、仙台フィルのコンサートマスターに抜擢されSPC大賞、セレーノ弦楽四重奏団にて緑の風音楽賞、松尾音楽助成などを受賞。05年より新日本フィルコンサートマスターに就任し、ソリストとしてもクリスティアン・アルミンク、ギンター・ピヒラー、外山雄三、ダグラス・ボストーク、佐渡裕らの指揮のもと国内外のオーケストラと共演。ミッシェル・マイスキー、ジュゼッペ・アンダローロらとの室内楽や各地の音楽祭にも招かれている。マレーシア・フィルやNHK交響楽団にゲスト・コンサートマスターとして出演。16年「題名のない音楽会」にピアノの上原ひろみとゲスト出演。6弦エレクトリック・ヴァイオリンにて久石譲の「室内交響曲」のソリストを務め、世界初演。20年、21年にはHiromi Piano Quintetのメンバーとしてブルーノート東京にて“Save Live Music Returns”に出演。Fuji Rock Festivalへの出演や全国ツアーを行った。ディスコグラフィも多く、いずれも好評を博している。

<http://tatsuo-nishie.world.coocan.jp/>



©Kazuhiko Suzuki

「なにも起きないだろうという無関心はもっとも危うくはないだろうか」

— ヴァイオリン独奏 西江 辰郎さんに聞く —

— 水響とは、2015年2月の第51回定期演奏会以来の共演となりますが、今回のオファーを受けて、どのように感じられましたか？
バルトーク（编者注：ヴァイオリン協奏曲 第2番）の時にそうであったように、熱意溢れる水星交響楽団の皆様となら是非取り組んでみたいと思い、とてもうれしかったです。

この難曲に挑戦しようとするとき、私には出来るか出来ないかではなく、やるかやらないかしかないという事はわかっているつもりでしたが、それでも決断するのに勇気のいる作品ですね。

ですが、この曲がいかに巧みに書かれているかという事は、オーケストラとの合わせのたびに痛感しています。

— 今回のブリテン「ヴァイオリン協奏曲」をこれまでで演奏された経験はありますか？

イザベル・ファウストのソロで新日本フィルで行ったのが2011年ですから（编者注：クリスティアン・アルミンク指揮、サントリーホール他）、それが最初でそれ以来ですね、正直ソロパートを勉強してみると、全く違う曲に感じます。

— 作曲家としてのブリテンの印象は？

私がブリテンの作品に接した機会はさほど多くなく、「戦争レクイエム」をハーディング、アルミンクというマエストロと行ったほかは、シンプルシンフォニー、他数曲といったところですね。それと幸運にもサイトウ・キネン・オーケストラで小澤征爾さんらによる、歌劇「ピーター・グライムズ」を観ています。

類まれな和声、抒情性、それに彼の音楽には常にどことなく気高さを感じます。

日本と同じ島国に生まれた作曲家と思えば親近感も湧きますが、イギリスは低地が多い。島国であることは間違いなく国民国家的な統率を取りやすいといえますが、「大陸と海で隔てられていることを感じさせない」という点でいえば日本とは異なります。イギリスといえば、ヴァイオリニストにとってはむしろ楽器のオークションや、ヴァイオリンケースの聖地ですね。

ブリテンは1913年生まれですから、大変な時代ですね！

1914年から第一次世界大戦になり、16年にはイギリスで徴兵制が敷かれ、18年休戦協定。29年世界恐慌。39年から45年が第二次世界大戦。

少し時をもどすと、イギリスでは産業革命がおき、工場労働者らの疲労対策の飲み物などとして紅茶を飲む習慣が庶民にまで広がったことにより、中国(清)から大量の茶を購入して膨大な貿易赤字を抱えていました。そこで貿易の不均衡を解消するために当時植民地であったインドでアヘンをつくり、清へ密輸を繰り返したことから起こったアヘン戦争（1840-42）、そしてアロー戦争がおこります。そしてドイツ、アメリカ、フランスの工業力が上がってきた第2次産業革命。当初はイギリスが真っ先に産業革命を達成して世界第1位の経済力を誇っていました。金本位制を採用して、世界の基軸通貨はイギリスのポンドでしたが、第一次世界大戦によって戦費調達での財政不安から力が徐々に弱まり、基軸通貨もドルへと移っていきます。

世界の経済構造は大きく変化し、それまで意外とうまく回っていたことがバランスの崩れから色々なことへと影響が及んでいく、そんな時代です。現代とも似ていますね。

——今回演奏される「ヴァイオリン協奏曲」について教えてください。

1938年に書かれ始めた彼の唯一のヴァイオリン協奏曲ですが、ブリテンは作曲の過程で当時の政治情勢により北アメリカへ向かいます。39年にカナダのケベックでスコアが完成され、40年にはニューヨークのカーネギーホールでスペインのヴァイオリニスト Antonio Brosa をソリストに迎え初演が行われました。オーケストラはニューヨーク・フィル、指揮はバルビローリでした。この協奏曲は比較的大きな編成のオーケストラが必要でプラスとパーカッションも多いです。ブリテンは調を書いておらず、ベルク*への敬意も感じられ、明らかにベルクの作品も意識しています。

*アルバン・ベルク オーストリアの作曲家。シェーンベルクの下で無調音楽と十二音技法を学ぶ。十二音技法の中に調整を持った後期ロマン派的抒情性を織り込んだ作風で知られる。(編者注)

実際ブリテンは1936年4月19日バルセロナでの ISCM (International Society for Contemporary Music: 国際現代音楽協会) で聴いたベルクのヴァイオリン協奏曲や歌劇「ヴォツェック」に圧倒されます。

ブリテンの初のソロ・ヴァイオリン作品 Op.6 も同音楽祭で4月21日に初演され、この時のヴァイオリニストが Brosa でした。ブリテンは Brosa に協奏曲のヴァイオリンソロパートについて相談しましたが、その後 Manoug Parikian (編者注: イギリスのヴァイオリニスト) の助けを借りて Brosa の名人的なパッセージを一部取り除いています。そのため1950年、54年に改訂が行われました。それでもかなりの点において挑戦的な技法が取り入れられていることから Brosa の技術は相当卓越したものであったことがうかがえます。

この曲は20世紀初頭の他の作曲家、ショスタコーヴィチやプロコフィエフ、同じイギリスの作曲家である Walton, Vaughan Williams の作品ようにオーケストラの短い序奏に続いてソロが始まります。

第2楽章ではスケルツォはでプロコフィエフの影響もみられます。

最終楽章にはパッサカリアと書かれていますが、ブリテンが1936年に聴いたショスタコーヴィチのオペラ「ムツェンスク群のマクベス夫人」(1932)にもパッサカリアが登場します。もともとスペインに起源をもつパッサカリアはこの時代、1925-50年以降、流行といっても良いほど多くの作曲家に用いられています。時代背景も第一次世界大戦に起因する貧民層の困窮から各地で反政府運動が激化、スペインでも内戦が起こるなどし、人々の世の動きへの意識の高さがうかがえます。

幸せな時と、抒情的な旋律、時代が思わぬような方向へとねじれていくかのような和声、気高さ、気品あふれる英雄的要素、産業のような打楽器的扱いのモチーフ、轟く管打楽器、すばしっこく動き回るフルート、神々しいトロンボーン、古い唄を新しい文脈で奏でるような弦楽器、

作曲家がどのような思いでこの作品を書いたのかが、あまり明らかにされていないという事はこの作品をどのように捉えるかが、一人ひとりに、自由に託されているのだと私は思います。

——では最後に、水響のメンバー、そして会場のお客様へのメッセージをお願いいたします。

かつて私が中学生の頃、社会科の先生に「なぜ歴史を勉強しなければならないのか」と尋ねたところ、「過去を学ぶことは未来を学ぶ事だからだ」と教わりました。ここしばらく世界の動きが目まぐるしく、世界史をあまり勉強してこなかった私はこのままではいけないと思い、今になってウクライナ、ロシア、そして中国など、日本からではなくそれぞれの国から見た歴史を紀元後からですが自分なりに学びなおしました。なぜそれほど遡らなければならなかったかという、歴史はいつまで遡るかによって、見え方が全く異なるからです。歴史を学べば学ぶほど安易に言葉が出なくなります、作曲家も少なからず時に翻弄される芸術家だと思います。

時代を生きるという事は、誰でも何かしら世の中に影響をうけ、また、影響を及ぼしているわけで、良かれと思って行ったことから思わぬ方向へ向かっていく、そんな歴史を繰り返してきた人類が、芸術や歴史からバランスの取れた未来を残していくヒントを得られるのではないかと私は思います。

芸術で警告を鳴らすことも可能なのでしょうか。

この移りゆく現代において、今この類まれな作品に取り組めることの意味、そして皆様と、すみだトリフォニーホールで時間を一緒にできることを非常にありがたく思います。



(このインタビューは、メールによるインタビューに応じていただいた西江さんの返信を再編したものです)

ベンジャミン・ブリテン ヴァイオリン協奏曲

ベンジャミン・ブリテン(1913~1976)はイギリス生まれの作曲家で、同国を主な拠点として活躍した。当団は彼の作品を比較的積極的に取り上げており、今回の「ヴァイオリン協奏曲」が5作品目となる。

彼の生涯については、第53回定期演奏会パンフレットにて当団員の櫻井統氏による詳細な解説が掲載されているため、そちらをご参照いただくと幸いです(水響ホームページ > HISTORY よりご覧いただける)。今回は作品そのものにスポットライトを当てて解説をしていく。

本曲の成立過程

本曲は1938~39年、スペイン出身のヴァイオリニスト、アントニオ・ブローサのために作曲された。ブリテンは当時25歳で、作品番号は15と比較的初期の作品に当たる。作曲の主な動機は、以前から名手ブローサと共演経験があったことと、1936年にアルバン・ベルクの「ヴァイオリン協奏曲」の初演を聴いたこととされている。

ブリテンは大変な速筆で、元々1938年に書き始めていたものを1939年5月に本格的に取りかかり、翌6月半ばにはほとんど書き上げたという。初演は1940年3月28日、ニューヨークのカーネギーホールにて、ジョン・バルビローリ指揮、ブローサ独奏、ニューヨーク・フィルの演奏にて行われた。その後何度か改訂が加えられ、現在の形に至っている。

本曲の構成

続いて、構成について見ていこう。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスといった広く知られるヴァイオリン協奏曲と比較すると、まず構成の点で大きく異なる。同じ3楽章構成ではあるが、上記の協奏曲が急-緩-急の構成であるのに対し、この作品は緩-急-緩の構成を取っている。一般的な協奏曲作品では、最後はソリストの超絶技巧を披露すべく、速いパッセージを用いて華々しく終結するパターンが多いが、この作品は終楽章で一度頂点を迎えるものの、それ以降は次第に落ち着いていき、最後は折るような雰囲気の中で静かに終わるといって、一般的な協奏曲と比べて少し異質な作品となっている。

ブリテン自身、出版社に宛てた手紙でこの作品について「今のところ、疑問の余地なく僕の最高傑作だ。あいにく割と重いけれど、覚えやすいメロディもある！」と書いており、彼の持つ悲劇的な世界観を反映した作品であると言える。当時のスペイン内戦(1936~39)や第二次世界大戦(1939~45)直前の欧州情勢への不安が作品全体に暗い影を落としている。ブリテンは反戦・平和主義者として

知られるが、後の「シンフォニア・ダ・レクイエム」、「戦争レクイエム」といった反戦作品へと繋がる作品と捉えることもできるだろう。

各楽章を詳しく見ていこう。第1楽章冒頭、ティンパニにより音型Ⅰが示される。この導入はベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」の影響も窺える。ファゴットがこの音型を引き継ぐと、それに導かれてソロ・ヴァイオリンが柔らかな旋律Ⅱを奏で始める。

その後、少しアップテンポになり、ソロ・ヴァイオリンとティンパニにより音型Ⅲが提示される。この音型Ⅲがオーケストラの各楽器によって再現されていき、その中でソロ・ヴァイオリンが活発な独奏を展開していく。その後一度落ち着くと、旋律Ⅱを短調に転じた悲哀な旋律がソロ・ヴァイオリンによって奏でられる。

再現部では冒頭での関係が逆転し、ソロ・ヴァイオリンが重音で音型Ⅰを演奏する中で、弦楽器群が旋律Ⅱを奏でる。最後は弦楽器群とティンパニによる音型Ⅰ、Ⅲの伴奏のもと、ソロ・ヴァイオリンが旋律Ⅱを変形した揺らめくようなソロを奏で、第1楽章は静かに閉じられる。

第2楽章は一転して急速なテンポで進行する。しかも単純な8分の3拍子ではなく、5小節、7小節フレーズやヘミオラの要素も用いられており、オーケストラにとっても特に難易度の高い楽章だ。プロコフィエフの「ヴァイオリン協奏曲第1番」第2楽章の影響も窺える。

一度全体が休止した後、ファゴットの8分音符に導かれてソロ・ヴァイオリンの独奏が始まる。ここからはソリストの腕の見せ所だ。オクターブ和音による進行の後、三度／六度／八度／十度の和音が目まぐるしく反復される。ソロ・ヴァイオリンとオーケストラによる掛け合い…否、リズムの応酬だ。

途中、8分の6拍子になるとやや落ち着いた曲調となり、ソロ・ヴァイオリンが妖しげな旋律Ⅳを奏でる。その後にはなんと2本のピッコロとチューバによるソロが登場する。こういった独創的な楽器の使い方からも、若きブリテンの意欲的な創作精神を感じ取ることができる。

再現部に入ると再び超絶技巧が繰り広げられ、そのままの勢いでコーダに突入。オーケストラが全奏で旋律Ⅳを奏で頂点を迎えると、ソロ・ヴァイオリンによるカデンツァとなる。カデンツァではフラジョレットの重音、右手で演奏しながらの左手ピッツィカートといった超絶技巧を用いて、旋律Ⅳや第1楽章の音型Ⅰ、Ⅲが繰り返される。この部分はぜひ西江辰郎さんの技巧にご注目いただきたい。ひとしきりカデンツァを終えると、そのまま切れ目なく第3楽章へと入る。

第3楽章はパッサカリアの形式が用いられているのが大きな特徴である。パッサカリアとは主に17～18世紀に用いられた古典的な形式の一つで、低音部に置かれた主題が次々と変奏されながら展開していくものであり、この楽章も一種の変奏曲の形を成している。(他に有名な作品だとブラームスの交響曲第4番 第4楽章でも用いられている。)

冒頭、カデンツァの余韻の中、トロンボーンにより主題Vが静謐に奏でられ、これがこの楽章を通じてのパッサカリア主題となる。曲は厳かな雰囲気が進んでいき、オーケストラだけで一度盛り上がった後、弦楽器群のトレモロの上でソロ・ヴァイオリンが"inquieta"(不安な)と指示された眩くような旋律を奏でる。その後、ホルンと木管が交互に運命的な動機を奏でていき、再度厳かな雰囲気になると、再びソロ・ヴァイオリンによる旋律が始まる。しかし今度は意志のあるソロであり、徐々に加速し、曲は激しさを増していく。

ソロ・ヴァイオリンにより高音域スピッカートの超絶技巧が披露された後、主題Vが重音の連続によって奏でられると、曲の盛り上がりはいよいよ最高潮に。低音楽器群が主題Vを強奏する上で、その他の弦楽器・木管・トランペットにより旋律VIが演奏される。オーケストラのみで一度盛り上がった後、ソロ・ヴァイオリンも旋律VIを繰り返す。しかし今度は大きく盛り上がることはなく、そのままコーダへと向かう。

コーダはソロ・ヴァイオリンによる独白のシーン。トロンボーンとハープのコラールの上で、"ad lib."(自由に)の指示のもと、不安と希望の狭間で揺れ動く心情が表現される。この曲の最大の聴きどころである。最後はオーケストラによるD(レ)とA(ラ)の空虚五度の上で、ソロ・ヴァイオリンが第3音となるF(ファ)とG♭(ソ♭)のトリルを奏で、長調か短調かどちらともつかないまま消え入るように結ばれる。

ブリテンとマーラー、いくつかの共通項

さて、今回のプログラムではブリテンとマーラーという2人の作曲家の作品を取り上げるが、この2人は活躍した時期も地域も異なり、直接の繋がりはないようにも思える。マーラーが亡くなったのは1911年、ブリテンが生まれたのは1913年であり、彼らの生涯が直接交わることは無かった。しかし、本日演奏する2曲を様々な視点から見ると、いくつかの共通項を見出すことができる。

まず、両曲ともそれぞれの作曲家の挑戦的な試みが垣間見える「意欲作」であったということだ。「ヴァイオリン協奏曲」の方は、先述の通り、第2楽章の途中で2本のピッコロとチューバという珍しい組み合わせのソロを登場させたり、第3楽章では古い時代の形式であるパッサカリアを用いたり、いくつかの実験的な試みが見られる。

若きブリテンの表現したいことが詰め込まれた作品であると言えるだろう。一方、マーラーの交響曲第5番は第2番～第4番の声楽付き交響曲から脱し、純器楽交響曲へと発展させていく中での最初の作品。マーラーの理想とする5楽章制を取りつつ、トランペット独奏のみで開始される第1楽章や、長大なスケルツォである第3楽章、弦楽合奏とハープのみで演奏される第4楽章など、数々の挑戦的な試みが組み込まれている。両曲とも、両作曲家が表現したいことが果敢に盛り込まれた作品であると言えよう。

また、両曲ともクライマックスでD-dur(ニ長調)の音階が用いられていることも共通している。「ヴァイオリン協奏曲」では第3楽章終盤、交響曲第5番では第2楽章の後半とそれが再現される第5楽章の最終盤で登場する。ニ長調は「神の調性」とも呼ばれ、まさに神へ祈りを捧げるような神聖な曲調を表している。ただ、交響曲第5番では祝祭的な雰囲気の中で ff 、 fff の喜びに満ちたコラールが奏でられる一方で、「ヴァイオリン協奏曲」では f 一つの内省的な響きであるといった違いも感じられる。

そして、ブリテン自身もマーラーの作品群から多大なる影響を受けている。大学入学直前の1930年に初めてマーラーの交響曲第4番を聴き、「そのオーケストレーションには驚いた。僕はマーラーの音楽を聴くためにあらゆる努力を払った」と後年回顧している。大学入学後はマーラー作品のスコアも研究したようで、1931年に書いたバレエ作品「プリマスの町」ではオーボエとクラリネットに「ベルを上げて」と指示された箇所があり、明らかにマーラーの影響が見られる。1936年にラジオで「大地の歌」を聴いた際には最も強い衝撃を受けたようで、「かつてこれほど感動的な別れの歌があっただろうか。今日はもう他のことは何も考えられなくなった」と日記に記している。「ヴァイオリン協奏曲」はそうしたマーラーの衝撃からまだ間もない時期に書かれた作品であり、その書法にマーラーから少なからぬ影響を受けていることは間違いないだろう。

ブリテンとマーラー。音楽史上では直接交わることのなかった2人の偉大な作曲家の共演をお楽しみいただくとともに、若きブリテンの熱のようなものも感じていただければ幸いである。そして、3度目の共演となる西江辰郎さんがこの難曲をどのように表現されるか、ぜひご注目いただきたい。

(森 勇人)

参考文献:
デイヴィッド・マシューズ著／中村ひろ子訳(2013)
『ベンジャミン・ブリテン』、春秋社

グスタフ・マーラー 交響曲第5番

美しいトランペットの鳴り響くところ

グスタフ・マーラーは、醸造所を営むユダヤ人ベルンハルトとマリー夫妻の12人の子供の2番目として1860年7月7日にボヘミア(現在はチェコ、当時はトーストリア＝ハンガリー帝国に属す)の小村カリシュトで生を受けた。幼少から音楽の才能を示したマーラーの才能を伸ばすため一家は、ほどなく近くの都市イーグラウ(現在のチェコのイフラヴァ)に移住し、マーラーはこの地で幼少期を過ごす。

家の近くには兵舎があり、聞こえてくる信号トランペット、号令の太鼓、兵士の行進曲などに少年マーラーは強い印象を受けたと言われている。それらはのちのマーラーの音楽を構成する重要な要素となった。早朝、あるいは夕刻兵士の練習するラッパの音を耳にしたのであろう。「美しいトランペットの鳴り響くところ」で幼少のマーラーは育った。

歌曲「美しいトランペットの鳴り響くところ」は、ドイツ民謡集「少年の魔法の角笛」の若い兵士達の過酷な境遇が歌われた、いくつかの詩を選んで作曲した歌曲集のなかの一曲(1988年作曲)。戦士した兵士が亡霊となって恋人の元に帰還するという歌詞は、

—美しいトランペットの鳴り響くところ

そこに僕の家があるんだ、緑の草場に埋もれて！—

と結ばれる。アウフタクトから始まる冒頭、付点音符の旋律は第5交響曲の第1楽章の葬送行進曲のイメージそのものである。第1楽章の葬送行進曲は、故郷に戻る兵士の帰還の音楽なのだ。

中期の器楽交響曲～交響曲第5番 嬰ハ短調～

生涯で9曲の交響曲を完成させたマーラーだが、第2から第4交響曲にはすべて「少年の魔法の角笛」と密接な関係を持ち声楽が含まれ、「角笛交響曲」と呼ばれる。続く第5から第7交響曲は、一転して声楽を含まない純器楽の交響曲として作曲された。

第5交響曲が作曲を開始されたのは1901年の夏。1897年にはウィーン宮廷歌劇場に任命され、オペラ指揮者としても作曲者としても名声を思うがままにしていたころである。多忙な生活のなか、作曲はもっぱら夏の休暇中に、オーストリア南部のヴェルター湖畔マイヤーニックで行われた。現在では、森の中の

素朴な作曲小屋は観光名所となっている。妻となるアルマとの出会いは1901年の秋である。アルマとの結婚は1902年の春で第5交響曲は、その年の夏に書き上げられた。

作品は全5楽章からなり、大きく3部に分けられる。第1部は第1楽章と第2楽章、第2部は第3楽章、第3部は第4楽章と第5楽章から構成されている。

第1楽章

葬送行進曲

《正確な歩みで、厳格に、葬列のように》

印象的な三連符の信号ラッパのようなトランペットの独奏で開始される葬送行進曲。聞いてすぐ感じるのは、超有名なメンデルスゾーンの劇不随音楽「真夏の世の夢」の12曲目「結婚行進曲」冒頭のファンファーレである。長調と短調かが判明する3度に上がるまではほとんど同じ。長調の「結婚」に対して「短調」の「葬儀」、これはパロディなのか？ 確かに「結婚＝人生の墓場」みたいな意味があると考えると面白い解釈ができそうだが、マーラーもそんな解釈をされることは分かりきっていたはずで、もしこの楽章の調性が結婚行進曲のハ長調に対してハ短調なら露骨にそう思われても仕方がない。しかもハ短調では、ベートーヴェンの第5交響曲や、葬送行進曲風の1楽章をもつブラームスの第1交響曲との関連性を議論されてしまう。それらを嫌って、半音あげて嬰ハ短調にしたのでは？と筆者は思う。冒頭のトランペットは結婚行進曲のパロディなどではなく、前述の「美しいトランペットの鳴り響くところ」との類似性からも、幼少期の体験からのマーラーのオリジナルだと感じる。

第2楽章

《嵐のように激しく、いっそう大きな激しさをもって》

イ短調のソナタ形式の楽章。文字通り嵐のように激しい主題から開始される。再現部の最後に、金管楽器によるニ長調の印象的なコラールが唐突に表れる。コラールが静かに終わったあと、冒頭の子題による激しいコードに入り、第1楽章の冒頭のトランペットとは音型が反転した下降する3度のモチーフで終わる。

第3楽章

スケルツォ《力強く、早すぎずに》

ワルツの主部と2つのトリオ、展開部をもつ複雑極まりないスケルツォ。この楽章のみで第2部が構成される。この楽章のみホルンは独立したソロと(Corno obligato表記、オブリガードホルン)と4本のパートに分かれて書かれている。

4本のホルンによる二長調の主題が提示され、オブリガードホルンが引き継ぎ優雅なワルツが開始される。主題が演奏されたのち、民族舞曲風の軽快なテーマが3本のクラリネットにより示される。ここでの楽譜の指示は、Schalltrichter auf! 意味はベルアップ。「!!」までついている。マーラーを演奏して感じるの、パート譜への指示の多さ。マーラーのドイツ語の指示を翻訳してまとめたホームページが多数存在するほどである。特にSchalltrichter auf! は頻繁に出てきすぎて、ラッパ隊は実はあまり指示に従っていない。忠実に従っているのがクラリネットパート。ここでは、もはや水響名物となっているクラの連続ベルアップに注目していただきたい。



Schalltrichter auf! (ベルアップ!)
LINE スタンプ「オケメンくまちゃん」より

オブリガードホルンの長大なソロの後ゆったりとした曲想の中間部に入る。再び主部、トリオ、オブリガードホルンのソロを経て、コーダに入り狂乱のなか終曲する。

マーラーは、この楽章に対して「これは真昼の光のなか人生の頂点にいる人間なのだ」と語っている。人生の頂点にいる人間とは、アルマとの結婚と第1子の誕生を控え人生の絶頂にいたマーラー自身に他ならない。

第4楽章

アダージェット

映画「ベニスに死す」(ルキノ・ヴィスコンティ監督、1971年)のテーマ曲に使われ、現在のマーラーブームのきっかけとなったマーラー全作品の中でも最も有名な楽章。

マーラーの音楽のよき理解者であり指揮者であったメンゲルベルク(1871-1951)によると、この楽章の草稿はなんの言葉も添えられずアルマへ送られたマーラーのラブレターなのだという。非常にロマンティックなエピソードとして現在伝えられているが、これを受け取ったアルマの心境ははたしてどうだったのか? ウィーン最高の音楽家からの重すぎる断れない告白と感じなかったのか?と思わざるを得ないが、作曲家としての才能もあったアルマは、曲の素晴らしさを理解し受け入れた。後にアルマはマーラーと自分の運命の糸を直観したと証言している。

弦楽器とハープのみで演奏されるこの楽章は、愛の告白に相応しい甘美で透明な美しさにあふれている。

第5楽章

ロンドーフィナーレ

ソナタ形式のロンド。第4楽章から休みなく、ホルンによるイ音の伸ばしで開始される。対話のようなファゴット、オーボエ、ホルン、クラリネットの掛け合いでいくつかのモチーフが示されたあと、ホルンによって主題が提示されフーガが開始される。曲頭で提示されたモチーフがフーガ主題として用いられながら、楽章終盤で現れるコラールの旋律が木管楽器によって提示される。ここでもSchalltrichter auf! (ベルアップ!)に注目。トランペットによる下降音型から続くホルンにより、冒頭の主題が再現される。その後それまでに提示されたモチーフが繰り返し現れ、前述の木管楽器によって示されていた旋律のコラールが金管楽器によって演奏される。この部分はTVCMなどで使われ非常に有名なところ。コラールの後半は、第2楽章の金管コラールの旋律へ接続され、狂乱のコーダで終結する。

グリンツィンに眠る

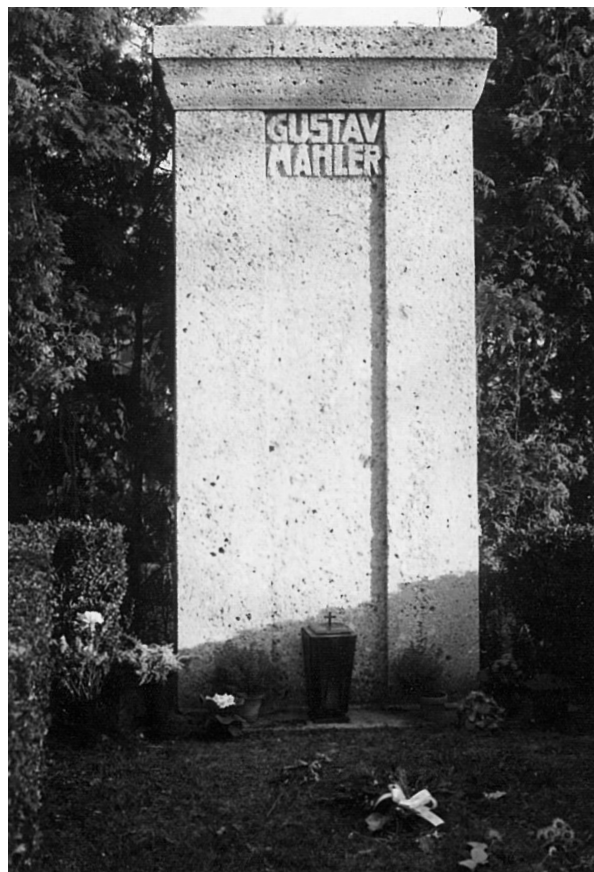
第5交響曲完成の1902年から9年後の1911年5月に、マーラーはウィーンにてこの世を去った。わずか9年の間に第6から第9交響曲まで完成させ、第10交響曲の草稿まで書き上げた。恐るべき創作力である。

マーラーの眠る墓地は、有名なベートーヴェンやブラームスが埋葬されていて観光名地となっているウィーンの中央墓地ではなく、ウィーン郊外のグリンツィンという小村にある。約30年前、筆者は所属していた学生オーケストラの演奏旅行にてウィーンの地でマーラーの交響曲第5番を演奏する機会に恵まれた。演奏会前日の自由時間にマーラーの墓前に、この交響曲の冒頭を捧げようと思いつき急遽グリンツィンを訪れた。今のように簡単にネットで調べることはできず、場所や行く方法などはホテルのレセプションに尋ねたと記憶している。

グリンツィンはウィーン中心から路面電車の終点で、墓地までは終点駅から徒歩10分ほどだった。他の観光客は誰もいないなか、翌日の演奏の成功を祈りマーラーの墓前に冒頭のトランペット演奏を捧げた。今ならその様子を動画に残し、得意げにSNSに上げていたに違いない。残念ながらその姿は残ってなく、マーラーの墓地の写真のみ見つけることができた。アルマの墓地は同じ敷地内の少し離れた位置にあり、生前のマーラーとの関係を示しているようだった。

30数年の時を経て、この写真に再び冒頭のトランペットを捧げようと思う。本番の成功を祈って。

(岩瀬 世彦)



グリンツィンに眠る (1990年2月撮影)

チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が
スマホで確認できるようになりました！



演奏会の概要



演奏曲の試聴



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの
メッセージ



楽団のWebサイト
SNS

アクセスはこちらから！



スマホのカメラを起動し、こちらのQR
コードにカメラをかざしてください

Powered by



Orchid

水星交響楽団

常任指揮者

齊藤 栄一

コンサートマスター

森 勇人

ファーストヴァイオリン

荒金 香帆

石塚 章子

市川 明葉

大西 彩加

奥野 葵

川原 ひかり

小染 慶

小林 紗耶夏

近藤 和

櫻田 泰斗

鈴木 牧

高橋 広

徳地 伸保

永井 翠

久光 幹太

米嶋 龍昌

劉 守珩

渡部 友賀

セカンドヴァイオリン

伊東 陽子

大西 一恵

岡田 莉沙

岡村 昂洸

落合 友佳里

織井 奈津乃

清水 花凜

◎砂川 湧

高杉 暁音

高原 苑

滝澤 蘭

土屋 和隆

富井 一夫

西沢 洋

前澤 郁弥

村部 一星

ヴィオラ

井上 拓

大澤 愛紬

岡本 裕二

小田中 里奈子

木村 納

◎古宇田 凱

大聖寺 将史

高岡 広太郎

西田 実

黄 晨浩

前田 あゆ美

牧原 正典

三上 さやか

宮崎 春菜

チェロ

大久保 雅子

◎金澤 直人

上竹原 修一

北岡 正英

首藤 ひかり

鈴木 皇太郎

橋 温子

中山 憲一

原田 大成

日吉 実緒

能岡 雅人

コントラバス

◎石附 鈴之介

上野 未夢

大西 功

片山 朔杜

刈田 淳司

小島 辰仁

壽川 賢太

長屋 裕大

花田 信彦

米山 宏祐

フルート

大山 司

斎藤 美唯

◎中澤 高師

本田 洋二

村上 芳明

オーボエ

石井 英久

菅野 勇斗

黒川 達郎

寺田 吉太郎

◎野口 秀樹

クラリネット

市村 広奈

清水 樹土

◎馬場園 真吾

前中 悠輔

横地 篤志

ファゴット

伊藤 綾香

薄井 潤一郎

◎小田中 優介

金谷 蔵人

ホルン

伊集院 正宗

大高 直哉

大山 美佳

岡本 真哉

◎島 啓

清水 颯太

田村 和俊

山崎 智哉

トランペット

浅田 健二

家田 恭介

◎岩瀬 世彦

金子 恭江

神山 優美

トロンボーン

石井 志歩

櫻井 統

佐々木 英王

◎佐藤 幸宏

チューバ

植松 隆治

パーカッション

安西 理玖

奥山 千穂

鈴木 日向子

高橋 淳

◎椿 康太郎

山本 勲

ハープ

東森 真紀子

◎: パートリーダー

本演奏会でご指導いただいたトレーナーの先生方 (敬称略)

高山 健児 林 憲秀 古野 淳 三橋 敦 柳澤 崇史 山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長 | 植松 隆治

コンサートマスター | 森 勇人

弦楽器インスペクター | 刈田 淳司

木管楽器インスペクター | 横地 篤志

金管楽器インスペクター | 佐藤 幸宏

打楽器インスペクター | 山本 勲

楽譜 | 伊集院 正宗 野口 秀樹 宮川 雅裕

ステージ・マネージャー | 櫻井 統

会計 | 浅田 健二 黒川 夏実 砂川 湧

運搬 | 刈田 淳司

広報・受付 | 市村 広奈 岡本 真哉 鈴木 牧 土屋 和隆 東海林 拓人

プログラム企画・制作 | 伊集院 正宗 伊東 陽子

チケット | 古宇田 凱 清水 樹土 砂川 湧

レセプション | 織井 奈津乃 永井 翠

チラシ・プログラムデザイン | 植村 真

次回演奏会のご案内

第66回定期演奏会

2023年11月12日(日) 12:30 開場 13:30 開演(予定)

すみだトリフォニーホール 大ホール

指揮 齊藤 栄一

ドビュッシー 管弦楽のための「映像」 ラヴェル 管弦楽のための舞踏詩「ラ・ヴァルス」 チャイコフスキー 交響曲第5番

水星交響楽団ホームページ <https://suikyoku.jp> お問い合わせ info@suikyoku.jp



水響